24 ヶ月から 30 ヶ月の自己調整について

○久津木文¹・小椋たみ子²・板倉昭二³

(¹神戸松蔭女子学院大学 人間科学部・²帝塚山学院大学・³京都大学文学部)

キーワード：幼児、自己抑制、自己調整

Self-regulation in 24-and 30-month-olds

Aya KUTSUKI¹, Tamiko OGURA² and Shoji ITAKURA²

(¹Kobe Shoin Women's University, ²Tezukayama Gakuin University, ³Kyoto University)

Key Words: preschoolers, self-regulation

目 的

我々人間が他者と付き合っていくなかで自分の欲求の赴くままに生きるわけにはいかない。時には、自分の欲求や意志を我慢することも必要である。この我慢をする能力は自己抑制や自己調整と呼ばれ、己を自制し様々な目標を達成するのに必要なだけでなく、他者との円滑で協調的な人間関係を形成するための社会的能力とも深く関わる非常に重要な能力である。

自己調整機能は生まれつき備わっているものではなく、他者との関わりあいのなかで3歳から5歳前後の間に急激に成長すること(柏木, 1988)が知られている。さらには、幼児期の抑制能力が青年期の大学入学試験での得点といった学力とも関連すること(Mischel et al., 1989)等が報告されており、自己抑制能力の成長は、欲求を我慢するといった社会的な役割の観点からのみならず、必要な物事に対する注意の分配といった高次の認知的機能、すなわち実行機能の発達との関連からも注目されている。

そこで本発表では他の認知及び社会性課題や発達レベルとの関連を調べることを視野に入れながらも、その第一歩として幼児期前期の子どもたちの“満足の遅延(delay of gratification)課題”における行動の変化についてまとめる。

方 法

対象児：N=14。縦断調査(24 ヶ月及び30 ヶ月の両時点)に参加し本課題に分析可能なデータが収集できたものを数に含めた。

実験手続き：全ての手続きは大学内の乳幼児実験室内で行われた。用いた“満足の遅延課題”はKochanska et al. (1996)の手続きに沿って作成し、一連の他の実験課題の最後として本課題を実施した。具体的な課題の手続きは次のとおりである。実験者は子どもにお土産があるので少し待つようにと幼児を座布団(もしくは子供用の小さな椅子)に座っておくように指示した。実験者はブースの外から水色の小さな紙袋を持って再入出する。その際「ほら、なんだと思う?○○ちゃんへのプレゼントだよ!」と幼児に話しかけ、注意が紙袋のほうに向いたら、続けて実験者は「ああ、リボン忘れちゃった、ちょっと待っててね、あとで一緒に見るから、お姉さん帰ってくるまで触っちゃだめよ。待っててね。」と伝え退室し、3分間の様子を観察した。セッション中、母親は子どもと一緒にいるが、不自然でない程度に子どもの行動や発言に干渉をしないように教示されていた。

分析方法：実験者が退室してから再入室するまでの約3分間の間の子どもの行動を記録し、さらに、離席までの時間やプレゼントに対する行動について得点化を行った。例えば、プレゼントに対する抑制得点の内訳は次の通りであった; 0点=プレゼントを袋から取り出す、1点=袋に手を入れる(しかし、取り出さない)、2点=袋を覗き混む、3点=袋に触れるが覗かない、4点=袋に触らない。

結 果

○抑制得点及び離席・開封時間の月齢変化：
いずれも有意な差なし。

表1 抑制得点と人数

	0	1	2	3	4
24 m.o.	7	1	3	0	3
30 m.o.	6	0	6	0	2

表2 開封・離席までの時間

時間(秒)	開封まで	離席まで
24 m.o.	99.43	33.50
30 m.o.	116.21	23.36

○抑制可能な子と抑制不可能な子の違い：

まず、抑制得点を用いて0点と1点の子ども(=抑制不可能な子ども)と2点以上の子ども(=抑制可能な子ども)とに群に分けたところ、24 ヶ月(可能=6人、不可能=8人)、30 ヶ月(可能=8人、不可能=6人)となり、有意な月齢変化はなかった。この群わけをもとにそれぞれの月齢で実施した発達スコア(KIDS-B)に得点差があるかを検討した。その結果、24 ヶ月時点で抑制可能な子どもは不可能な子どもよりも運動得点が低く、表出言語得点が高い傾向があることが判明した($p < .10$)。発達得点には他にも下位領域が存在するが、それらには違いが見られなかった。

図1 24 ヶ月での運動・言語得点の比較

考 察

24 ヶ月と30 ヶ月の子どもを縦断的に分析したが、この6 ヶ月の間に大きな行動の変化はみられなかった。しかしながら、実際にプレゼントに触ったかどうかを基準に群分けをし、発達得点との関連をみたところ、我慢できた子どもは運動能力が低く、言語表出能力が高いという傾向があることが示された。柏木は自己調整機能を本研究で用いられたような我慢をする能力である「自己抑制」と欲求を他者に表現し伝える能力である「自己主張」の二つの側面から理解する必要性を提唱している。今回の結果からも行動的に抑制ができた子どもは言語をよく話すことが示され、自己主張する能力が高いのかもしれない。このことから、これら二つの側面を総合的に見る必要があるだろう。

今回の実験場面における子ども実際の発話の分析や他の社会性及び認知的課題との関連についても検討したい。

引用文献

- 柏木恵子(1988). 幼児期における「自己」の発達-行動の自己制御機能を中心に. 東京:東京大学出版会.
- Kochanska G, Murray K, Jacques TY, Koenig AL, Vandegeest KA.(1996). Inhibitory control in young children and its role in emerging internalization. *Child Development*, 67, 490-507
- Mischel W., Shoda Y., Rodriguez M.L.(1989). Delay of gratification in children. *Science*, 244, 933-938.